

# ポストモダニズム期のレジャー理論

——M・フーコーの「権力論」「身体の政治」に関連して——

橋本 純一

## 1. 緒言

戦後、急速に拡大したインダストリアリズムの進展による経済成長は、着実に労働時間短縮と休日・休暇の拡大を進行させ、ライフスタイルの近代化・消費化を急速に促進し、高度大衆消費社会を世界の各地に誕生させた。人々は、生産的世界における機械化・組織化・合理化の過剰ストレスに対応して、諸費の世界における生の充実を求めるようになっていく。競争的地位の獲得とその維持をめぐる展開する競争は、必然的に存在の不安を蔓延させ、潜在的に仕事・役割によるアイデンティティの弱体化を促す。したがってそこではそれに対応するかのように、自我・個的主体の確立という要請がプレッシャーとなり、存在の不確かさが（半ば脅迫的に）レジャーの充実へ向かおうとする膨大なエネルギーを生み出している。

このような状況下において、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）を目指すレジャー（余暇、余暇活動）とはどのような性質のものであるべきなのか、を改めて問い返しその社会的意味を確認し、研究のオルタナティブなパースペクティブを展望することは極めて重要なことである。

C・ロジェック（Rojek,1993, pp.277-278）によると、レジャーの社会的・文化的理論の発展は大きく三つの「時期」に分節化して考察することができる。それは「第二次世界大戦末から1970年代初頭までの「機能主義の時期」、その後1980年代中期に至る「政治化の時期」、1980年代中葉から始まる「ポストモダニズム<sup>1</sup>の時期」である。

本稿では近年におけるレジャー理論の変容をクリティカルに概観し、特にロジェックが、M・フーコーの「権力論」と「身体の政治論」を援用しつつ展開したレジャー理論のポストモダニズム期における適用妥当性を検討する。

## 2. 「政治化」期から「ポストモダニズム」期へ

C・ロジェックのいうレジャーの「政治化」期において、ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズの貢献を抜きに語ることはできない。彼らの調査・研究や著作によって、社会におけるレジャーやスポーツが、単に社会的に必要なものであるという機能主義的な認識から、より能動的・文化的・政治的なものであるという認識に変

容していった。

このようなレジャー研究の視点は、J・クラークとC・クリッチャー<sup>2</sup>の著作『悪魔が労働を創った——イギリス資本主義におけるレジャー——』（Clarke&Critcher,1985）に典型される。彼らによる強調点は以下の通りである。

- 1) レジャーの諸形態や諸活動は、社会的・歴史的に構成されているということを認識することを重視する。つまりレジャーは社会的に構成される。
- 2) レジャーは社会の「文化的」次元に位置づけられ、それゆえに経済的、政治的關係からは相対的な自立性を持つものとして理解される。
- 3) レジャーは——レジャーそれ自身に内在する特徴であるがゆえに——、抑圧と解放の弁証法を認識する理論的社会モデルを通してのみ正しく理解される。

このような視点からのレジャー分析においてはカルチュラル・スタディーズに共有されるキー概念「ヘゲモニー」が中核となっている。

ウィリアムズ (Williams, 1977, p.110) は、ヘゲモニーを「諸意味や諸価値の生きられるシステムである。・・・すなわち社会の多くの人々にとっての『構成されている、また構成しつつある』現実感覚であり、・・・生活のほとんどの領域で経験される現実であるので、社会の大半の成員にとって乗り越えることが困難な、絶対的感覚なのであり。」と捉え、究極的には「語の真つ当な意味で『文化』であるが、特定階級の生きられている従属や支配としても理解されなければならない文化なのである。」

クラークとクリッチャーはレジャーを一つの生きられている文化として認識し、コンフリクトの現場と捉えたのである。これらの諸闘争は、支配や被支配をめぐる競争が繰り返し生ずる日常生活構造の一部なのである。さらにクラークとクリッチャーによればレジャーは2つの点でヘゲモニー闘争に不可欠であるという。

第一にレジャーは、意味や世界観、社会的慣習をめぐる文化的コンフリクトが行われる社会生活の一領域であると理解される。「有害なもの」を押さえ込もうとする動き、「訓練され」、「改善された」レジャー活動の奨励が、英国では特に若者や労働者階級に関して展開されるレジャーの一貫した特徴である。

第二に、「レジャー」は労働とは区別され、分離された領域であるという、まさにその考え方がヘゲモニーを表していると指摘する。このような考え方はもはや常識となっているが、資本主義的生産関係の発展の歴史が、他方では労働日や労働条件、休日などをめぐる闘争の歴史であったということを覆い隠すのに役立っているのである (Clarke&Critcher, 1985, p.228)。

このようなレジャー研究のパースペクティブからすれば、レジャーは決して自由なものではなく、しかし完全に決定されている活動ということでもない。それは潜在的に支配集団と従属集団間の文化的コンフリクトが絶えず行われる闘技場なのである (Clarke&Critcher, 1985, p.227)。

上記のようなカルチュラル・スタディーズからのアプローチをロジックはポストモダニストの見地からクリティカルに検討する。ロジックによればポストモダニズ

ムは「労働とレジャーの境界の削除、高級文化と大衆文化の間の区別の消失、一般的スタイルとして、ごた混ぜと陽気なコードの組み合わせ」を強調する。そしてポストモダン状況のなかで、社会は「ハイパーリアリティの状況に移行しつつある」(Featherstone, 1991) すなわちここでは「現実」「模造」との間の差異が相互に互換的なものとなる。遺跡センター、文学的ランドスケープ、戦争や生活様式の歴史的再現などのレジャー産業の例とともに、現代のテレビはこのような状況を典型的に示すものである、とし、レジャー研究の議論において、オルタナティブ・アプローチは、その領域全体を支配する闘争的パラダイムに従うことが重要であると述べるのである(前掲 Rojek, 1993)。

### 3. フーコーのレジャー認識

ロジェック(Rojek, 1985)はミッシェル・フーコーの著作を検討しつつレジャーにおけるパワー(権力)の問題に触れて以下のようにまとめている。

レジャー理論にとってのフーコー理論の関連性は、以下のような2つの理論的関心に求められる。

- (a) 権力に関する考え方
- (b) 身体政治

彼の貴重で広範囲に渡る知的業績は、M・ウェーバーとその類似性が指摘できる。二人は権力と合理性への関心を持ち、合理的知は、人間社会の発展において本質的にその推進力であるというニーチェ的悲観論を共有している。そして啓蒙活動がテロリズムに変容してゆくさまや解放の名における抑圧について秀逸な論を展開している。しかしウェーバーは合理化を、世界を呪術から解放するすべての過程と捉えたのに対し、フーコーは合理的行為のマイクロ政治学と相対主義を強調した。同様に、ウェーバーは合理化を、レジスタンスを押しさえ込む一方的過程として扱う。この点についてフーコーは合理化の死滅を和らげる権力をも考えることを強調する。

以上のような解釈の下、「権力」と「身体政治」に関するフーコーの考えを分割された2つの副題として取り扱うのである。

#### a. レジャーに纏わる権力

ロジェックはフーコーの権力論の第一の特徴はその積極的影響力の強調にあるとする。権力の機能的効果へのフーコーの関心は、意識的に支配的な権力モデルと対照させることであった。我々は、喜んで行為する時、自由を制限するものとして

権力を捉える傾向にあるが、フーコーの仕事が示そうとしたのは、自由は権力の組織化と行使に積極的な効果を持つものであるということである。例えば、我々の市民的自由は法のルールに制限されるばかりではなく、それに基づいているのである。

フーコーの権力論の第二のテーマでは、マルクス主義者が階級レベルでの権力闘争に焦点を当てているのに対して、彼はこれを偽りの抽象論であると退け、諸個人、家族、諸制度が階級闘争の「一般的発生源」であることを暗示している。そして個人の行為は「上からの押し付け」を拡大するものとして不当に概念化されている、とする。それゆえ、フーコーにとって権力はいかに微力であろうとも、すべての人が有するもので、社会に偏在する資産なのである。それは所有されるものというより関係の連鎖と言った方がよいものである。

彼は上記のような理解の下、フーコーの権力関係の分析にとって重要な点を以下のようにまとめている。

- (1) 権力は差異化の現象として検討されなければならない。その具体例として、特権、地位、富、知識、能力の諸関係を挙げている。
- (2) 権力はその対象に関連させて検討されなければならない。個人を導く明示的暗示的目標は権力配備の支配下にあり、その反動にも晒されている。
- (3) 権力はその具体化に関連させて検討されなければならない。これは権威や服従を呼び起こすような、権力関係における多様な「記号」の検討を意味している。
- (4) 権力はその制度化の程度に関連させて検討されなければならない。例えば、権力の「記号」を支える権力の伝統的、法的、軍事的、経済的、政治的メカニズムに関連させて。
- (5) 権力は合理化に関連させて検討されなければならない。例えば、権力の程度は所与状況におけるコストと諸利益の個人的な合理的計算に基づいている、というようなことである。

以上のように権力論をまとめながら、フーコーのパワー（権力）分析はレジヤーに関して以下のような三つの議論を提出したという。

第一に、フーコーの分析は、ひとつの権力形態としてレジヤーを位置づけている。このような捉え方は、レジヤーを自由と同一視する形式主義的見解とは対照的である。可能性と規定性の権力の性質において、レジヤーは自由と統制が同時に概念化されるべきであるとフーコーは言うのである。

第二に、フーコーの議論では、レジヤーと社会生活の他の領域との相互依存関係を強調する。彼は既存の階級モデルや国家論によらずにこの議論を進めている。その代わりに彼の分析はレジヤー活動が権力の錯綜した局面やいろいろな方法で社会に浸透する規律と密接な関係があることを示している。

第三に、レジヤー議論における歴史的局面的重要性を唱えた。彼は、レジヤーの組織化が社会において神に授かったもの、あるいは社会の自然な部分という如何なる考え方も拒否する。

以上のようなレジヤの位置付けはほぼ的を射ているように思われるが、かなり抽象度が高く、解釈の余地も大きい。

第一・第二の点の関連でいえば、プーランツァス（1984）は、フーコーにおいては国家権力行使のための多くの場所（アサイラムや病院の装置、スポーツの装置）が無視されているという。確かに、フーコーが取り組んだのは軍隊、警察、監獄、法廷などのディスクールの諸装置が中心であったが、しかし、そこでは大衆、民衆が意図的・意識的な形で登場してくる実践（プラクシス）の面を人間の生活であるとして対象とするのではなく、それぞれのプラティークを考察の対象にしていることも忘れてはならないことである。つまり、資本主義的な関係に組み込まれている表の部分だけでなく、裏の、食事をしたり、歌を歌ったり、テレビを観たりするような状況のプラティークを対象にしているのである。したがって、プーランツァスの指摘は、おそらく、フーコーの権力観；「国家、主権、自由、禁止という用語」による分析をしない（フーコー、1986）という方法に起因するものであろう。

第三の歴史的側面の強調は必ずしも歴史の一般理論を構築することではなく、人間経験の諸形式と権力と知の諸関係との間にある様々な結び付きを詳細に検討することである。それによって、現在を構成する合理性の諸形式と権力の諸技術の系譜学的分析である「現在の歴史」を提出しようとする試みである。

## b. 身体の政治

次にロジックは身体の政治の議論に移る。フーコーによれば権力がどのように作用しているのかということは、身体の政治的エコノミーを研究することにより明らかになる。すべての彼の研究は身体と社会との差異に基づいている。そして次の四つの視点から身体に関する疑問を解き明かしている、という。

- (1) 放浪する、あるいは失業中の身体の世界組織
- (2) 「従順な」身体の世界創造と監視
- (3) 病院収容と身体の世界的管理
- (4) 身体におけるセクシュアリティの表現

これらの視点からの問いにおいて、身体は権力の社会的技術の客体として扱われている。そしてこれはレジヤ理論に重要な意味があると解釈するのである。

また、産業化により身体の世界新しい社会管理と規律の様式が生み出され、その四つの原則——私的空間の個別化、活動の規格化・習慣化・自動化——を示している。これらは「規律・訓練社会」の証であるという。これらは国家と独占資本の効果的で新しい監視技術と結び付いている、とフーコーは理解する。しかし、彼の主張の核は、現代の民衆は彼らの感情と欲望を自発的に規制・コントロールするという考え方にある。個々の身体の世界規制と合意は、維持され再生産されるという認識は、家族、学校、工場

等のマイクロレベルでの関係においてである。

さらに身体がひとつのマシンとして考えられ、扱われる傾向は、産業化、労働時間の増殖、訓練上の戦略の拡大過程における当然の帰結であるという主張や、マス・レジャーの「マシンのような」特質は、社会学の文献に顕著であるということ、マルクシストがしばしばレジャー時間の行動が資本主義の職業的領域の諸要求によって構造化されているという主張を受け、狂気、規律、セクシュアリティに関するフーコー著作の読解から、レジャー関係は自由の関係とはイコールではない、という彼の考えに本質的同意する輩もいるだろうという。それは規律、訓練、コード化、統制の諸関係なのである。

しかし、フーコーの著作からレジャーに関してのスタンスを推定するには大きな障害がある。フーコーの仕事は新しいシステムの構築を目的とせず、彼は神話を見破り、既存のシステムの欠点を突き止めることに関心がある。そうではあっても、そのようなスタンスはレジャーをめぐるディスクールに真っ先に取り組んでいるともいえるのではないか、それは、レジャーが社会において「健康」か「不健康」かを調査し始めることではないか、とも述べている。

そして、すべてのフーコーの仕事はどのようにしたら社会研究（しいてはレジャー研究）から何かを知ることができるのかという疑問を抱かせる、と懐疑的なスタンスを示し、最終的に明らかになるのは提出されている疑問に直接応えるものではなく分析のレベルに関してであろう、とし、それは、様々なレジャー関連クラブや結社におけるローカルハンドブックや会員資格録といったレベルのデータにアプローチしてゆくことが必要になり、そのようなデータは選択的な分野で優勢な権力や統制の形式に関する真実を見抜くために利用でき、それは、そこに潜んでいる問題を顕在化させることにつながるのである、と結論付けるのである。

もとより、フーコーのアプローチは「いかにして権力は行使されるか」「権力行使の効果とはどのようなものか」という問いに収斂してゆく性質のものである。権力のディスクールとその諸技術は「権力を出現させるための権力」（フーコー、1981）を隠蔽してしまったが、それによって隠されてしまった権力諸関係を露にするため、権力のレベルについての方法論上の注意事項を語っている。

それは分析がそれ自体として関わるべきは権力行使あるいは権力の実際の働きや、その適用領野と諸効果であって、所有や意識的意図といった問題ではないということである。分析は、物事が進行中の従属のレベル、すなわち、われわれの身体を従属させ、われわれの身振りを統治し、われわれの振舞いを指示する等々の連続で途切れることのない諸過程のレベルで作用する仕方に焦点を合わせなければならない。分析は、支配を行使するための集団、階級、個人の動機もしくは利害・関心に注意を集中する代わりに、主体が客体化する権力の諸効果として構成されるような、多様で複雑な諸過程に向けられるべき、と考えている。

また権力の効果についても、最も重要な効果は、ある一定の身体、ある一定の身振り、ある一定のディスクール、ある一定の欲望が個人として同一化され構成されるようになることである（フーコー、1976）。つまり、個人は権力の効果であると同時に、

その分節化の要素でもある。この観点からすれば諸個人は権力の代理人でもなく、権力を所有するものでもなく、自分たちの可能性を権力によって潰されたり、譲り渡されたりもしない、と理解できる。

### c. フーコー理論に対する批判

最後にフーコー理論に対してのメジャーな二つの批判を検討している。第一に、フーコーの権力に対する考え方は変貌自在で、それ故に掴みどころがない、ということである。そのような分析では世界のすべての出来事は最終的に権力に還元されてしまう。もし権力が「至るところにある」というのであれば、それは間違いではない。しかし権力の「理論」としては、その告発的・予測的内容からは実質的に何もえるものがない。それゆえ、彼の権力についてのコンセプトにはその歴史的特定性と社会的利害関係の両者が欠如している。代わりに、権力は社会システムの普遍的資産として理論化され、至るところにあるということで、いわば逆説的に逃げを打っているのである、と理解するのである。

第二に、歴史は権力の「作用」の結果であるという彼の主張は、人間主体の地位に関連する本質的な問題を導く、という。彼は、フーコーの議論では社会的行為者が単に権力の服従者であるというような印象を与えているという。「従順な」身体の生産と再生産に関する議論がそのよい例である。それはギデンス (Giddens, 1981) が存在する諸条件を変化させてゆく行為において歴史的束縛などを跳ね除けてゆく個人の能力を強調していることを引用しながら説明される。

第一の点に関して、フーコーは確かに社会秩序の至るところで権力の広がりや浸透の跡を追い求めている。しかし、「告発的、予測的」研究内容のすべてにおいて何も得るところがないのか。また、彼の業績のいかなるところの何を持って何も得るところがないというのか。フーコーは権力の個々の歴史、諸々の技術と戦術を明らかにするために、ミクロなレベルから分析を進めるべきとし、そこからのボトムアップ的な権力分析により、諸々の権力メカニズムがいかにして支配の諸形式によって領有され、変容され、開拓されてきたのかを明らかにすることができる。そしてその分析は権力のメカニズムと経済的・政治的制度との相互結合を明らかにしようとしながらも、一般的・普遍的「理論」を想定したり、その場所を用意したりしてはいない。

また、何から何まで権力という時、それは社会的に可能な状態が何であることを示すと同時に、社会的には見えないものを、また、非ディスクール的な域を示すことであり、至るところに権力があるという価値判断を探っていたのではない。

第二の主体性の問題はフーコー権力論の中で最も議論の多いところに入るものである。われわれは権力諸関係に従属してはじめて主体となりえる。その意味で権力の服従者というのであればあながち誤りではない。山本(1992)の労作で確認されたように、フーコーの権力は「パストラル (牧人) 権力」と「ディシプリンの権力」の二つの軸で捉えられよう。この二つの要素を持った権力が、主体化＝個人化を図るといえる。換言すれば、前者が「他者への気遣い、世話」であり、後者が「自分への気遣い」と

いう傾向性である。スマート(1991, p.222)の言葉を借りれば、フーコーの諸著作は、「統制と依存」に従うと同時に「意識もしくは自己知によって一個のアイデンティティ」に縛りつけられるという、主体という語の二つの意味において、人間存在が諸々の主体とされてきた客体化の諸様式の分析として読むことができるのである。

また、権力諸関係は抵抗と闘争の分析を通してよりよく理解されると考えているように思われる。西洋社会の一連の対立は、階級闘争の原動力に還元されるものではなく、「女性に対する男性の、子供に対する両親の、精神病に対する精神医学の、人口に対する医療の、人々が生きる仕方に対する管理行政の」(フーコー、1984)権力に関わるものであった。このような諸形式における闘争を分析上の重要な論点として認めることは、支配と搾取に対する闘争が止んでしまったと認めることにはならない。逆に、フーコーの立場は支配、搾取、服従の様々なメカニズムの間には複雑で循環的な諸関係があるというのである。しかし、この諸関係は、服従と主観性の諸形式を決定する諸関係へと還元されるものではない。この意味でロジェックの批判は的を射ていないように思われる。

#### 4. 結語

かくして、これらのフーコーをめぐる議論はとかく経済的パワーのみを過大評価しがちな昨今においては特に再検討する必要があるように思われる。スマート(1991, pp.105-123)がいうように、権力は、「自分たちの利害や意思を他の人々の利害や意志に関わるように、また、それに抵抗するようにして実現させる行為者たちの能力として定義されてきた」のが、行動や政策決定への関与の放棄という「惰性態」や、権力を見えなくさせる「隠蔽」という権力行使を証明させるところまで拡張されてきたのである。

レジャーは、「労働 VS レジャー」という資本主義的関係のみで認識されきれないものであろう。また、レジャー活動は特に、諸個人が自由選択の行使や個人の表現を享受するような分野を示すという事実は、レジャーを定義し特徴づけるために自由と束縛の有無が問題なのではなく、諸々のレジャー活動にはつきりと現れる自由や束縛の個別の性質が問題なのであり(ハーグリーブス, 1992)、レジャーとしてひとまとめに概念化したり、プラティークという「習慣の心性・行為」を見逃したりすることが問題なのである。

---

#### 注

<sup>1</sup> ポストモダンの概念については諸説があり定義付けには困難を極める。「モダン」というタームは19世紀ヨーロッパで発生した「モダニティ」がその語源である。そして「モダン」期についても、第二次世界大戦頃までという説に始まり、それ以後の様々な出来事の節目の時期までとするものが存在する。しかし最も遅い区切でも1980年代末のベルリンの壁崩壊までというのが国際的に許容される理解であろう。筆者はアンドリュウ・ブレイクの見解(ブレイク, 2001)を参考にし

ながら、ここでのポストモダン期を1980年代後半以降としたい。

<sup>2</sup> クラクとクリッチャーは英国のCCCS (The Center for Contemporary Cultural Studies =パーミンガム大学現代文化研究センター) に影響を受けたブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズに属する研究者である。カルチュラル・スタディーズはひとつの学術分野というより、ひとつのムーブメントであり、傾向性、論争点、問題設定において緩やかに共通性を保持しているグループである。多くの人々にとって、このつかみどころのなさは、カルチュラル・スタディーズの魅力のひとつとなっている。特にブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズは世界のカルチュラル・スタディーズのリーダー的存在となっている。

#### 参考文献

- バーナウアー, J&D. ラズミュッセン(1990) 『最後のフーコー』 山本 学他訳 三交社  
ブレイク, A(2001) 『ボディ・ランゲージ〜現代スポーツ文化論〜』 橋本純一訳 日本エディタースクール出版部  
Clarke, J.&Cricher, C.(1985) *The Devil Makes Work*. Macmillan.  
フーコー・M(1975[1961]) 『狂気の歴史』 新潮社  
同上(1969[1963]) 『臨床医学の誕生』 みすず書房  
同上(1974[1963]) 『言葉と物』 新潮社  
同上(1981[1969]) 『知の考古学』 河出書房新社  
同上(1977[1975]) 『監獄の誕生』 新潮社  
Featherstone, M. (1991) *Consumer Culture and Postmodernism*. Sage.  
Foucault, M(1976) “Two Lectures” in Gordon(ed.) *Michel Foucault*, Brighton(1980); Harvester Press.  
フーコー・M(1984[1982]) 主体と権力 『思想』1984-4 岩波書店  
同上(1986-7[1976-84]) 性の歴史Ⅰ-Ⅲ 新潮社  
Giddens, A.(1981) *A Contemporary Critique of Historical Materialism, Power Property and The State*, Macmillan.  
ハーグリーブス・J(1992[1986]) 『スポーツ・権力・文化』 佐伯聡夫他訳 不味堂出版  
プーランツァス・N(1984[1978]) 『国家・権力・社会主義』 田中正人他訳 ユニテ  
Rojek, C.(1985). *Capitalism and Leisure Theory*. London: Tavistok.  
Rojek, C.(1993). *Ways of Escape*, Macmillan.  
スマート・B(1991[1985]) 『ミッシェル・フーコー入門』 山本学訳 新曜社  
レマート・C&G・ギラン.(1991[1982]) 『社会理論と侵犯の営み』 滝本往人他訳 日本エディタースクール出版部  
Williams, R. (1977) *Marxism and Literature*. Oxford University Press.  
山本哲士(1992) 『社会科学理論研究』 文化科学高等研究院出版局

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2008年2月18日 採録決定